

## 小野 修先生を送る

今 関 恒 夫

小野修先生が1996年度をもってご退職になる。ここに、先生から学んだことのあれこれを記すことを依頼された。これに過ぎる名誉はない。しかし、はたして私とその適任者であるかどうか、浅はかな理解によってかえって先生にご迷惑をおかけするのではないか、とのおそれもまた禁じえない。寛容な先生のことであるから、イギリス風の苦笑とユーモアをもって許していただけるものとして、奮勇をふるうことにした。

小野修先生が同志社大学文学部英文学科教授に就任されたのは1976年のことであった。英文学科には、当時から英米文学、英語学・言語学以外に英米地域研究のコースがあり、浜田清夫、明石紀雄両先生と今関が担当していたが、明石先生の他大学転出にともない小野先生が加わってくださったのである。ブリティッシュ・カウンシル留学生の経験をおもちであり、バートランド・ラッセルやジョージ・オーウェルの研究者、平和学につよい関心をいだかれているが、英文学にも該博な知識をおもちの方だと聞いていた。はじめてお会いした先生は、細身で精悍で鋭い視線と穏やかな雰囲気をあわせもつ方という印象であった。そうした印象は、その後のお付き合いのなかでも変わることはなかった。

小野先生の学問の特徴は、一方で、その根底に平和学があることから察せられるように、現代的国際的視座に据えられた社会的（国際的）実践との深い関わりであり、他方で、平和の実現を志向する広義の思想的基盤の追求

という点にある、と私は思う。現代世界の平和が問題となるとき、の結節点ともいふべき地域（それが、小野先生にとっては、東南アジア諸国でありアイルランドであった）への大規模な民間援助活動や学問的関心はその交錯からくるものであるにちがいない。小野先生といえば、だれもが思い出すのは、休暇期間を利用したタイ・ビルマ・カンボジアなどへの度重なる「海外渡航」であろう。それは先生の学問と実践的関心との緊張からくる当然の営みなのである。そして、こうした面における学問的成果が『カンボジア・そのユートピア』（1988）であり、『アイルランド紛争』（1991）などである。

こうした実践的関心を基礎づける思想的基盤は、小野先生の場合、さらに二面からとらえられるであろう。つまり政治学、さらには平和学という理論的側面と、思想史という歴史的側面である。前者は『市民社会の平和と安全』（1980）、『政治における理性と情念』（1982）、後者は『バートランド・ラッセルの政治思想・漸進的社会改造理論の一考察』（1961）、『オーウェル現象の社会学・国家と個人』（1984）などに結実している。もっとも、先生の学問は、学界のみを相手とした、方法的に先鋭で、文献的に周到ではあるが、あまりに専門的で素人には皆目見当がつかないといったふうなものとは、いささか趣をことにしているように見受けられる。したがって、理論的、歴史的といった腑分けをしてみても、どうしても先生の関心がつよくあらわれて、専門領域をはみだしてしまう部分がある。現実には平和をつくりだすための理論・思想こそが問題であって、そのために必要な研究（実践もまた然り）に果敢に挑まれていく。たとえば、アイルランド問題の淵源を辿ってオリヴァー・クロムウェルの研究にいたる、というふうである。「実践的専門化」ともいふべきこのような研究方向は、学問の専門化が進む一方で、解決すべき問題が巨大化し、深刻化している今日、ますます必要とされているのではなからうか。

このように、先生は現実に向き合う政治学者であったが、同時に英文学科でもおおきな役割を果たされた。英文学科の必修科目「英米思想史」を一貫

して担当され、英米文学や言語学を学ぶ学生諸君に、独特の観点から英米の思想的背景を語り続けられた。この20年間の営みは同志社大学英文学科に、ある特色を植えつけたにちがいない。英米圏の政治・社会・文化に関心をいだし、先生のゼミを履修した学生諸君のなかには、先生のさらにつよい感化を受けた者が少なくないはずである。先生には何か若者を惹きつけ動かす力があったように感ずる。それが何であるか、うまく説明できない。先生の研究室のもつあの雰囲気にも似て、エネルギーで、量感に溢れた独特の姿であり香りである、とでもいうほかはない。先生はさらに、コーディネイターのとしての力量を発揮され、英語英文学専攻の先生方を糾合して、『20世紀イギリス作家の肖像』（1993）、『イギリス文化と国際社会』（1996）などの書物を編纂されている。こうした活動をとおして、先生独自の英文学科のあるべき姿を模索されてきたのではないかと推察する。英文学科にかぎらず、大学の進むべき路、学問のありようがきびしく問われている今日、先生が踏みしめてこられた思索と実践の足跡は、省みるべき多くの問題をわれわれに提起しているのではなかろうか。

20年間をこえる同志社経験（それには、それぞれ2年間にわたる就職委員長、人文科学研究委員会委員長としてのお働きも含まれる）のなかには、先生が歯痒い思いで見られてきたことも多くあったにちがいない。しかし、先生は、どの場合にも、鋭い視線で見据えられながらも寛容な態度を持してこられた。そして、ある意味では、超然としてご自分の路を歩いてこられたのだ、と思う。お住まいのある岩倉から自転車で通勤されていたあの体力と精神力の強靱さをもって、これからも、これまで以上のご活躍を、またご健筆をふるわれることを祈ってやまない。